様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０３３０２

研究課題名（和文）イランにおける「宗教」の社会的布置の変化に関する人類学的研究

研究課題名（英文）An Antholopological Study on the Social Configuration of 'Religion' in Iran

研究代表者
椿原　敦子（Tsubakihara, Atsuko）

龍谷大学・社会学部・准教授

研究者番号：００７２６０８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、イランにおける追悼儀礼を調査対象として、ミクロな儀礼の実践が、マクロな政治経済的変動と関わりながら発展する過程を分析し、宗教の社会的布置の変化を考察することである。具体的にはイスラームを政体に掲げる国家であるイランにおける儀礼アソシエーションの通時的・共時的比較を行い、活動の場の空間的変遷や市場経済との関わり、儀礼の画一化や多様化を促す諸力を分析することで、追悼儀礼の実践が社会的にどのように位置づけられてきたのかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は宗教研究における世俗化論・ポスト世俗化論や宗教の私事化・脱私事化論を実証的に検討するための人類学的方法論を提示するという学術的意義を持つ。また、儀礼の実践と倫理的主体の形成に関する議論を整理した上で、儀礼というミクロな場が日常生活や国家の権力とどのように結びついているのかを明らかにすることで、「イスラームの人類学」が社会に還元してきたイスラーム理解の枠組みを更に深化させるという社会的な意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：　This study explored the social condition of "religion" by focusing on the mourning rituals ('azadari) in Iran. I conducted field research to clarify how the practice of the mourning rituals has been diversified historically, as well as the difference in the practice by social strata. By making diachronic and synchronic comparisons and analysis of the sites of ritual, I examined ritual groups' relation to the market economy and the various forces driving the uniformity and diversification of rituals. Then the study clarified how the practices of the mourning rituals related to the social disposition of religion.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学　イスラーム　儀礼　イラン　言説的伝統　パフォーマンス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

人類学において「宗教」の社会的布置を問い直す研究は、一方ではリベラリズムやフェミニズムなど世俗主義に依拠した政治哲学における宗教理解への批判として、他方では宗教を文化システムや社会秩序の青写真とみなす人類学的研究への批判として発展してきた。たとえば T. アサドは政治哲学におけるリベラル世俗主義の形成過程や人類学における宗教・儀礼概念の再検討を通じて、双方を見据えた問題提起を行っている。アサドは宗教実践を、身体技法や感情のコントロール、議論などを通じた自己鍛錬の過程として捉えることで、これまで信念を宗教の核と仮定し、そこから繰り出される実践形式の多様性を追ってきた人類学的宗教研究に新たな視座を開いた。彼はミクロな自己鍛錬の実践と、それを一定の方向に差し向ける国家などの権力の介在により、公共領域における「宗教」は多様な現れ方をすることを系譜学的に解明している［アサド 2006］。

アサドの研究を継承して、イスラームの人類学的研究では礼拝や読書会・勉強会、説教に耳を傾ける人々などのミクロな実践について参与観察を行い、行為規範がいかにして合意に至るのか、またこうした実践がどのような支配的・対抗的言説を参照しているのかを明らかにする民族誌が書かれてきた［e.g. Mahmood 2005］。これらの研究により、集団内部の宗教実践の政治的動態を捉える手法が確立されたが、いくつかの方法論的課題が残されている。第一に、こうした研究が概して単一の実践の場を扱っているため、人々は複数の規範を使い分けながら生活世界の秩序を形成しているという点が見落とされている点である［Schilke 2009］。第二に、ミクロな宗教実践がマクロな政治変動とどのように関わるのかが明らかにできていないという点である［Soares & Osella 2009］。

２．研究の目的

本研究は上記１で述べた課題に対する方法論の提示として、特定の儀礼を執り行う場と集団の通時的分析を通じてミクロな宗教実践とマクロな政治構造の関係を明らかにすることを目的とする。イランのようにイスラームに基づく統治を確立した国家の内部で起きている宗教実践の変化も、社会経済的な変動や政教関係の変化と関わっていることが指摘されてきた［e.g. Adelkhah 2000］。ただし、こうした議論は宗教施設への政府施策など構造的変化が宗教実践を規定するという立場からの研究であり、実践上の変化が社会的にどのようなインパクトを与えるのかについては検討されていない。

イランでの宗教儀礼の盛衰が政府の奨励・抑制策と関係してきたことは歴史学の分野で明らかにされているが、儀礼が価値の混乱に直面した人々による意味世界の整序の動きであることが十分に考慮されてこなかった。そこで本研究は、イランで「追悼儀礼'azadari」を行う儀礼アソシエーションの変容に着目し、時期ごとにどのような人々が追悼儀礼の担い手の中心となり、実践上の変化が見られるのかを調査・分析することで、イランにおける「宗教」の社会的布置の変化を検討する。

３．研究の方法

本研究は、当初 3 か年のフィールド調査を中心とするプロジェクトとして計画されていたが、最終年度末に行う予定の調査の一部が感染症の拡大により実施できなかったため、期間を延長して 6 か年のプロジェクトとして研究を行った。

2017 年度は、次年度以降に実施する調査を行う準備として、過去に実施した調査成果の発表、研究課題に関連する書籍や雑誌の収集、調査協力者への協力要請を行うと共に、(1)儀礼アソシエーションからの聞き取り調査、(2)宗教用品市場についての調査を実施した。

2018 年度は、宗教儀礼への参与観察および関係者からの聞き取り調査を行い、儀礼を執り行う集団が基盤とする社会的紐帯についての分析を行った。

2019 年度は、前年度に調査を行った儀礼アソシエーションの主催する儀礼集会へ引き続き参与観察を行い、個々のメンバーにインタビューを実施した。また、これまで継続的に調査を行ってきた儀礼アソシエーションが「学校」と地域でのつながりを基盤してきたことが前年度までの調査で明らかになったことから、言語やエスニシティ、職業を基盤に構成される儀礼アソシエーションについても調査を行い、比較考察を行った。

2020 年度から 2022 年度にはこれまでの調査データの分析と文献・映像資料の収集と分析を行った。

４．研究成果

(1) 儀礼の調査を通じた公共性と宗教性の再検討

テヘラン市南部と北部にて、儀礼アソシエーション設立の経緯や活動概要、社会的紐帯に関する調査を行った結果、特定の人物のリーダーシップやその世襲的継承が強調される儀礼アソシエーションと、メンバーの平等性が強調される儀礼アソシエーションという二つの傾向が明らかになった。設立年代が古い集団ほどリーダーシップやその世襲を強調し、設立年代が新しい儀礼集団ほど小規模で平等性を強調する傾向が見られる。ガージャール朝期までの追悼儀礼が富裕な商人や地主などがパトロンとなって執り行われてきたことを鑑みれば、比較的古い儀礼集団が特定の人物のリーダーシップの下に組織されていることは理解できる。新しい儀礼集団の特徴である平等性の強調に関しては、先行研究によれば 1950 年代ごろから組織されるようになった、学生や非伝統的な職業集団による追悼儀礼の特徴であると見られる。古い儀礼集団が特定の個人によるパトロネージュに基づき、不特定の公衆に開かれた大規模な催しを開催していたのに対し、新しい儀礼集団はメンバーの平等性を強調しながら、相対的に小規模で閉じた儀礼空間となっていることは、イランにおける公と私の切り分けが変容してきたことを示している。

他方で、追悼儀礼の社会的位置付けを検討すると、当初の研究計画で想定していた「宗教と世俗」という二項対立をイラン社会へ適用することの妥当性が疑問に付された。政府の掲げるスローガンでは、追悼儀礼は「文化」であるとされている。歴史的に見て、儀礼の実施形態が華美で娯楽的な要素を多分に含む場合に宗教界（イスラーム法学者）からの批判が起きることはあるが、追悼儀礼そのものが「宗教」的かどうかを問われることはない。しかし、哀悼儀礼にまつわる管理－財の寄進から公道の利用、儀礼での説教の有無の把握など－は、革命前のワクフ庁や革命後のイスラーム宣教機構など、政府の宗教関連機関が行っている。こうした状況を総合的に見れば、追悼儀礼を宗教／世俗のどちらかに位置すると見ることは適切ではなく、追悼儀礼は他の日常的実践と同じく、現世的な事柄（文化）をイスラーム的に行うための実践の場であると考えられる。

現代の小規模な儀礼空間での実践は、儀礼の場や様々なプログラム、食事などを提供する人々、複数の儀礼の場に出入りして祈願を行い、一連のサービスを受け取る人々という二種類の実践者から成り立っている。調査からは、両者は単なるモノやサービスの贈り手と受け手という関係ではなく、異なる種類の祈願の実践者であることが明らかになった。モノやサービスは追悼儀礼の対象であるシーア派第三代エマーム・ホセインに捧げられることで贈り手と受け手を対等な立場に置く。儀礼のプログラムや供されるモノ・サービスは儀礼アソシエーションごとに異なっており、サービスを受け取る人々は祈願成就の可能性などを頼りに複数の場を渡り歩く。追悼儀礼の形態の多様性は、儀礼アソシエーションの基盤となる社会的紐帯（バーザール商人や学生、革命防衛隊のメンバーなど）と結びつきながら、イラン社会における追悼儀礼の複層性を形作っていることが明らかになった。

(2) イラン大衆芸能の変遷と儀礼の関係

本研究では、従来は 12 イマーム・シーア派に特有の＜宗教儀礼＞という視点から研究されてきたイランの追悼儀礼について、その宗教性を一旦留保した上で国家や宗教界が時代ごとにどのような態度を示してきたかを検討した。このために行ったのは、20 世紀以降のイラン大衆芸能の変遷についての研究と、イラン革命前後のフィクション映画の分析である。

先行研究においても、20 世紀初頭からの国家による追悼儀礼の包摂は、近代化・世俗化や中央集権化といった要請から行われ、必ずしも宗教界の見解とは一致しなかったことが指摘されている。20 世紀後半以降のイランのフィクション映画における追悼儀礼の描写を分析からは、村落や下町の＜民俗文化＞としての扱いから、次第に儀礼のパフォーマンスが＜伝統芸術＞として演出上の技巧に用いられるようになったことが明らかになった。イラン革命後には追悼儀礼の描写は相対的に減少し、追悼儀礼が体現する殉教物語そのものを題材とした映画が出現した。このことは、映画を＜宗教的＞な教化の手段とするという革命後の政策と関係していると考えられる。

総じて追悼儀礼は、宗教界と国家の言説により社会的な位置づけが変化して来た。19 世紀中葉以降のイランでは国家の奨励により儀礼が盛んに行われるようになり、その流れは 20 世紀初頭に反近代性を理由として一旦抑制されたものの、イラン革命を経て再び隆盛を迎えた。21 世紀には電子メディアを通じて儀礼はこれまでの詩の朗誦よりも視覚やリズムを重視する傾向が強まったことが、本研究で明らかにされた。

（引用文献）T. アサド (2006) 『世俗の形成』みすず書房; S .Mahmood (2005) *Politics of Piety.* Princeton UP; S. Schilke (2009) 'Being good in Ramadan', *RAI* 15: S24-S40; B. Soares & P. Osella (2009) 'Islam, Politics, Anthropology' *RAI* 15; S1-S23; F. Adelkhah (2000) *Being Modern in Iran*. Columbia UP

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 椿原敦子	４．巻 18
２．論文標題 映画と酒場：フィルムファールスィー研究のための試論	５．発行年 2022年
３．雑誌名 イラン研究	６．最初と最後の頁 172-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 椿原　敦子	４．巻 21
２．論文標題 イラン大衆音楽の空間的構成をめぐる考察：伝統と近代の二項対立を超えて	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国際社会文化研究所紀要	６．最初と最後の頁 171-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 椿原敦子
２．発表標題 髭とチャードル：テヘランの追悼儀礼における比較と模倣の実践
３．学会等名 日本文化人類学会第57回研究大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 椿原敦子
２．発表標題 フィクションとしての追悼儀礼
３．学会等名 日本中東学会第38 回年次大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 椿原敦子
２．発表標題 無我の共同体：イラン・テヘラン市における追悼儀礼のトポロジー
３．学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 椿原敦子
２．発表標題 ムスリムの暮らし、ムスリムとの暮らし～おもてなしから共生へ
３．学会等名 龍谷大学「現代的課題と建学の精神プログラム」第5回（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 椿原敦子
２．発表標題 イラン・テヘランのホセイン追悼儀礼における＜自己＞
３．学会等名 国立民族学博物館　共同研究「ネオリベラリズムのモラリティ」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 椿原　敦子（Atsuko Tsubakihara）
２．発表標題 Being There, Under the God: A Consideration on Collectivity in Iranian Shiite Mourning Rituals
３．学会等名 International Convention of Asia Scholars（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 椿原敦子（Atsuko Tsubakihara）
２．発表標題 Being Maddah in Contemporary Iranian society
３．学会等名 La culture populaire au Moyen-Orient（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計6件

１．著者名 椿原 敦子（項目執筆）	４．発行年 2023年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 748
３．書名 イスラーム文化事典	

１．著者名 栗本 英世、村橋 勲、伊東 未来、中川 理、加藤 敦典、賈玉龍、李俊遠、森田 良成、椿原 敦子、岡野 英之、上田 達、木村 自、早川 真悠、藤井 真一、竹村 嘉晃	４．発行年 2022年
２．出版社 大阪大学出版会	５．総ページ数 312
３．書名 かかわりあいの人類学	

１．著者名 椿原 敦子（項目執筆）	４．発行年 2020年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 826
３．書名 中東・オリエント文化事典	

１．著者名 椿原 敦子	４．発行年 2019年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 312
３．書名 グローバル都市を生きる人々	

１．著者名 椿原 敦子、黒田賢治	４．発行年 2018年
２．出版社 星海社	５．総ページ数 208
３．書名 『サトコとナダ』から考えるイスラム入門　ムスリムの生活・文化・歴史	

１．著者名 椿原 敦子（第15章担当）／ 小杉　泰、黒田　賢治、二ツ山　達朗　編	４．発行年 2018年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 288
３．書名 大学生・社会人のためのイスラーム講座	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 From Comparative Religion to the Historical Sociology of Interactions among Faith Traditions	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関